

# 福音 ア・ラ・カルト

23のショートメッセージ

## 竹尾潤Takeo Jun



伝道出版社

## はじめに

福音<sup>ふくいん</sup>ということばは、辞書を引くと、「よい知らせ、喜ばしいおとずれ」というような意味が記されています。そして、もう一つの意味として、「キリストによつて罪人が救われる」という教え」というような意味も、必ず載つてゐるはずです。

世の中には、よい知らせがたくさんあります。病気が治る、お金が儲かる、試験に合格する、などなど。これらのことも、人によつては、確かに福音と言えるかもしれません。けれども、最もすばらしい福音は、実は、後者のほうなのです。

その福音は、どのようなキリスト集会（教会）でも、そのための集まりが持たれ、そのつど語られていくと思います。ですから、後者の福音がなぜいちばんすばらしいかということは、集会に行き、そこでお話を聞けば、よく説明がなされると思います。

けれども、なかなか集会に行く時間がないという方や、あるいは、今までまったく聖書の話を聞いたことがないという方、また、聖書を読んでもよくわからないという方もいらっしゃるかと思います。それの方に対して、このすばらしい福音を、できるだけわか

りやすくお伝えしたいという趣旨のもとに、この本は出版されることとなりました。

集会で福音が語られる場合、どんな場合でも、だれが語つても、「主イエスを信じない」（使徒の働き一六章三一節）という結論にたどり着きますが、その切り口はさまざまです。また、必ず語らなければならない重要なポイントもいくつがあります。この本は、それらの事柄を二十三の章に分けて、なるべくその章自体で、話が完結するようにしました。ですから、最初から最後まで順番に読んでいただけたらいちばんよいのですが、気軽に、興味のあるところから読んでもいいようにも構成されています。

この本の題名の「ア・ラ・カルト」とは、「献立表によつて選ぶ一品料理」のことです。ですから、一章一章を好みに応じて読んでいただこう、という意味が含まれています。

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」にあるように、聖書のみことばは、人間にとつて、肉体の糧がよりもっと大切な、本当の意味での食物なのです。

この本が、読まれた方にとつて、少しでも福音を理解する助けとなることを切に願つています。

はじめに

最後に、伝道出版社のJ・B・カリー兄、出版にあたり、いろいろご尽力くださった北嶋幹士兄をはじめ、編集や校正に携わってくださった姉妹方に、この場をお借りして、お礼を申し上げます。

二〇〇六年十一月

竹尾潤

## 目次

はじめ	3
1 天地創造について	8
2 神について	13
3 聖書について	18
4 人間について	25
5 死の起源について	30
6 罪について	35
7 この世の終わりについて	42
8 死後のさばきについて	47
9 悪魔について	54
10 神の愛について	59
11 神の御子イエス・キリストについて	65

三位一体について	12
キリストの誕生について	72
キリストの生涯について	83
キリストの十字架について(1)	90
キリストの十字架について(2)	95
キリストの復活について	103
キリストの昇天と再臨について	112
永遠のいのちについて	117
信仰について	122
悔い改めについて	127
従うことについて	134
信仰生活について	142

## 1 天地創造について

初めに、神が天と地を創造した。（創世記一章一節）

何事にも初めがあります。生命には誕生した瞬間がありますし、建物にも建築された時があります。製品ならば、製造された時があるはずです。私たちは、そのことを当然のこととして理解しています。

そうであるなら、私たちの住んでいる地球や、広大な宇宙にも、「必ず初めがあつたはずだ」とは思われないでしようか。永遠の昔から存在していたのではないということは、だれもがうすうす感じていると思います。けれども、宇宙の始まりがいつで、どのようにできたかについては、いまだに明確なことがわからないのです。いろいろな研究者がいろいろな説を唱えますが、残念ながら、決定的なものがない状況です。人間のちっぽけな頭

でこの先いくら考へても、それを解明することはむずかしいでしよう。

はつきり言えることは、これらのものが偶然に存在することはあり得ない、ということではないでしょうか。家にしても製品にしても、それらのものが存在しているということは、それを作った人がいるということです。それらのものが偶然にできあがることはあります。それが複雑なものであれば、なおさらです。では、この地球や宇宙はどうでしょう。実に秩序正しくできています。地球は一定の速度で自転し、公転しています。太陽との距離も、生物が生きていくのにちょうどよい距離を保っています。こんなに精巧なものが、偶然にできあがつたと考えるほうが不自然です。

地球の誕生は、今から約四十六億年前と言われています。では、四十六億年あれば、地球や宇宙は偶然にできあがるのでしょうか。そもそも、この四十六億という数字も、きちんと立証されたわけではなく、あくまでも仮定に基づいた机上の論理にすぎません。ただ、今日、多くの学者たちの間で主流の見解となっているので、そのまま事実の「ごとく扱われているだけなのです。

人間が理解できる時間の感覚は、せいぜい百年から千年ぐらいです。その範囲の中なら、冷静な判断をすることができます。ですから、「この地球は、千年かかって、偶然にできあがった」と言われば、おそらくだれも信じないでしょう。それはあり得ないと、常識的に判断できるからです。

しかし、四十六億年となると、何となく、「そんなこともあるのかな」と思ってしまうのです。その数字は理解の範囲を超えているからです。何百円とか、何千円とかいうお金しかもらつたことのない小学生が、いきなり何十億円もらえると言われても、ピンと来ないのと同じです。いわば数字のマジックです。けれども、千年であろうと何十億年であろうと、あり得ないことは、あり得ないです。

ナチスの独裁者ヒトラーは、自著「わが闘争」の中で、大衆は小さなうそより大きなうそにだまされやすい、というようなことを書きましたが、このことにもぴったり当てはまります。

では、偶然にできたのでないなら、この地球と宇宙はどうやってできたのでしょうか。その明確な答えが本章の冒頭のことばです。神がこの宇宙と地球を造られた——これが、

人類がずっと考え続けてきたことに対する単純な答えなのです。

頭のいい学者がたくさんいながら、なぜ、この単純な結論がほとんど受け入れられないのでしょうか。それは、彼らが「神はない」という前提の下に物ごとを考えているからです。神がおられるという選択肢を初めから除外し、そのうえで結論を模索しているからです。彼らにとって、神の存在を認めることは時代に逆行しているように思われ、科学者としてのプライドが許さないだけなのです。そのような風潮は、十九世紀後半ころ、進化論の誕生とともに起こりました。しかし、冷静に判断すれば、そのような考え方こそ非論理的であり、非科学的だと言えるのではないでしようか。

そもそも、この宇宙と地球が偶然にできあがるということは確率的に皆無です。多くの学者がその確率を無視して、偶然というものに神と同等の力があるとみなしているのですから、それは、もはや信仰と呼ぶべき事柄です。

確かに、日本にも外国にも、神がこの世界を作ったという神話があります。そのような話は明らかに人間の創作だとわかりますから、それらの話を事実として受け入れている人はいないでしょう。けれども、聖書に書かれていることは、それらの神話とはまったく違